丹生谷龍教授近影

丹生谷教授へのオマージュ

手島　　孝

われら熊本県立大学人すべてのかねて敬愛措く能わざる丹生谷龍先生が、この3月でめでたく古稀の寿を祝われ、同時に、本学の規程により停年退職される。会者定離は人の世の理（ことわり）ながら、われわれが“総合管理”学部創業の意気に燃えてこの地に集（つど）った4年前からの歳月の経過の余りに迅きを、今更のように嘆ぜざるをえない。

一身にして二生という。本学に赴任されるまでに、先生はすでにその第一の人生を見事に完結しておられた。すなわち、1951（昭和26）年、わが国有数の大企業三菱レイヨンに入社されて43年余。この間、取締役（総合企画室長として4年、総務人事部長として1年）から、常務取締役（5年）を経て、専務取締役（2年）にまで進まれ、さらに常勤監査役（4年）を勤められた。退社後、悠々と自適の境に遊ぼうとしておられた折も折、パブリック・アドミニストレーションとビジネス・アドミニストレーションを統合する新機軸の学部創設に“目玉”としてトップ・マネジメント出身学者の招聘を企てた本学の、白羽の矢は先生に立った。ここで三顧の礼というのは、上長の先生に対して失礼であること承知の上で、この比喩を許していただくならば、わが大学は、劉備そこのけの熱意と執念で、ついに諸葛孔明の出盧に成功した。もとより、そこに働いた最大の動因が、もともと熊本とは何の縁もゆかりもなかった東京生まれ東京育ちの先生ご自身の、人生意気に感ずる昭和一桁（ひとけた）の義侠と決断、そして今日なお心身ともに壮者を凌ぐ勃々たる開拓者精神にあったことは、いうまでもないが。

こうして、1994（平成6）年4月、大学教授としての先生の第二の人生が始まった。年齢的に停年延長の特例措置によった（着任時すでに、先生は本学正規の停年々齢を超えておられた）とはいえ、それは、けっして余生といった

優雅なものではなく、新学部完成へ向けまさに全身全霊を打ち込んだ獅子奮迅の底(てい)のものであった。主に労務・企画畑を歩んだビジネス・マンの当時から、研鑽おさおさ怠りなく、幾つもの論著もある先生は、「過去半生の企業の実務と経営の経験を活かして」「現実に役立つ理論構築」めざし、労務管理論、経営監査論および経営責任論を担当、研究に教育（講義・演習）に没頭された（引用は、熊本県立大学研究者総覧1997年版から）。その成果の一端を、われわれは、「終身雇用」や「三菱の経営雇用政策」を歴史思想的に究明された最近の諸ご論文に見ることができる。

当地での先生の学究生活は4年と短かったが、これには前史が付け加えらるべきだろう。すなわち、大戦直後1945（昭和20）年から6年間、先生は旧制の第一高等学校文科と東京大学法学部に学ばれた（蛇足ながら、ちなみに、旧制の高校は、今の高校が後期中等教育機関であるのとは根本的に違って、大学の専門高等教育に連なる一般高等教育を任としたのである）。実は、前後合わせてちょうど10年となるこの大学生活こそ、先生にとって、あるいは人生のご本懐ではなかっただろうか。私は、先生の本質は文人たるにあると確信する。両三年前、何かの談しのついでに、童門冬二の『小説・横井小楠』と榊莫山の『空海書韻』が話頭に上り、先生と私、期せずして同じ関心で両つともに読んでいて、思わず顔を見合せたことがある。前者の主人公は、いわずと知れた肥後“実学”の先駆者（しかし預言者故郷に容れられず）、後者では、書家の余技とは思えぬ闊達な筆致とイマジネーションで“丹生”のルーツが探られている。

先生が、学部において（学部長に推されかかったが固辞された）、全学において（評議員を一期勤められた）、自ずから重きをなし、信望を一身に集められたのも、また宣べなるかな。長老をいたわろうとする若い同僚たちの好意を謝しつつも同じ諸雑務を進んで引き受け、孫のような学生たちをこよなく慈しんで、新学部一期生の就職には、その閲歴と人脈をフルに動員、東奔西走南船北馬の労をいとわれなかった。きびきびした所作の裡(うち)に蔵された温厚篤実の人となり、視野あくまで広く慎重にして果断な判断力は、同世代人の中でも小柄な先生を、つねに巨きく大きく感じさせた。

いま、先生を送るにあたり、万感こもごも去来して、惜別の情、量り知れない。願わくは先生には、故山にお還りの後もくれぐれもご自愛ご加餐なされ、４年間先送りとなっていた世界漫遊など、奥様とのお約束を是非とも果たされんことを。本学で後進に率先垂範、示教された理論と実践の統合の業は、われわれに引き継がれ、必ずや大成を見るであろう。